



二十六年6月 月例研修会

資料

明日香追想Ⅱ

「飛鳥路に万葉歌碑を訪ねて」

講師 水本 洋 氏



奈良・人と自然の会

(担当：歴史文化クラブ)

6月例会 『飛鳥路に万葉歌碑を訪ねて』

担当幹事 杉本 登

飛鳥路に初夏が訪れてきました。皆さんと一緒に万葉の故地を歩き、古墳や謎の石造物などを訪ね、山の麓、川のかたわらにひっそりとたたずむ『万葉歌碑』を巡り、万葉人に思いをはせながら飛鳥路を歩きましょう。

采女(うねめ)の 袖吹きかへす 明日香風 京(みやこ)を遠み いたづらに吹く

志貴皇子 卷一―五二

明日香川 瀬瀬の玉藻の うちなびき 情は妹に 奇りにけるかも

卷十三―三二六七

日時 6月9日(月) 9時30分集合

場所 近鉄橿原神宮駅前駅東口(9時41分発のバスで甘樫の丘へ行きます)

コース (約8キロ)

橿原神宮前駅―バス―甘樫丘(万葉展望台・飛鳥風歌碑)―飛鳥のかはづ歌碑
―飛鳥の夢市―水落遺跡―飛鳥寺西門跡・蘇我入鹿の首塚(飛鳥寺)―飛鳥の宮
跡横断―伝板蓋宮跡―石舞台古墳(巨大な石の石室は、蘇我馬子の墓か?)
―玉藻の歌碑―川原寺の歌碑―亀石―天武持統合葬陵―中尾山古墳(文武天皇
陵か)―高松塚古墳・紅の裳裾歌碑―国営飛鳥歴史公園館桧隈川歌碑
―吉備姫王墓・猿石―欽明天皇陵―岩屋山古墳―飛鳥駅

案内役 水本 洋氏 (前大養万葉記念館に協力する会 代表)

TEL 072-772-11879

携帯 090-4568-5192

Eメール hironiz@bca.bai.ne.jp

《飛鳥の歴史と万葉集》

飛鳥は日本の故郷、日本人の心の故郷などといわれる。六世紀の末頃から七世紀の終わり、西暦六九四年大和三山の中ほど、藤原京に遷るまでの日本の帝都の地であった。わずか南北二キロ、東西一キロぐらいの狭いところに都が幾つも営まれた。そしてこの時代は『大化の改新』『壬申の乱』など古代天皇制確立にいたる壮大なドラマの時代であり、また日本最古にして最大の国民歌謡である『万葉集』の時代でもある。しかし、現実の飛鳥にはわずかな石造物を除いては当時のものは何も残っていない。平凡な田舎の風景に過ぎない。だが古代史の知識や万葉集を知って歩くと、この平凡な風景にたちまち古代の幻影が蘇ってくるし、万葉人の息づかいが聞こえてくるのである。明日香村を貫いて流れるささやかな流れが万葉集をはじめ歌に名高い『飛鳥川』である。山裾の一本の道は吉野へ通じる道で『大化の改新』のクーデタの前夜、中大兄皇子、後の天智天皇が藤原鎌足と決意を秘めて南淵請安という大陸帰りの学者のもとに通った道であり、『壬申の乱』の前年、大海人皇子、後の天武天皇と麩野讚良野皇女、後の持統天皇が近江を逃れて吉野に入った道なのである。これから『大化の改新』『壬申の乱』などの古代史のドラマを縦糸に、『万葉集』を横糸に飛鳥の歴史と万葉人の息づかいを訪ねてみたい。

『大化の改新』の前の政治情勢は天皇、(そもそも『天皇』という呼称は『壬申の乱』を勝ち抜きその權威を確立した天武天皇に始まる。それまでは大王・オオキミと称していた)を中心とする統一国家では勿論なく、豪族、蘇我氏、物部氏、大伴氏、阿部氏、葛城氏、和仁氏、などの連合国家で、天皇家はその一つにすぎなかった。豪族の中でも五八七年、物部氏を滅ぼした蘇我氏の勢力は天皇家と婚姻を通じて強大となり、天皇家をしのぐほどになっていた。『石舞台古墳』は蘇我馬子の墓といわれ日本書紀には天皇にしか許されないはずの『みささぎ』と称していたという。たとえば、崇峻天皇は馬子に反抗したというので五九二年に殺された。この時代にあっても天皇が臣下に殺されるというようなことはかつてなかったことである。しかも崇峻天皇の母は蘇我稲目の娘、馬子の妹の子、即ち馬子の甥であり、更には馬子の娘、河上娘女の夫でもある。あの聖徳太子も蘇我氏の血(母、穴穂部間人郎女は蘇我稲目の孫娘であり、妻の刀自子郎女は馬子の娘)が濃く流れているが、到底、蘇我氏に對抗できなかった。それどころか太子亡き後、馬子の娘、法提郎媛と舒明天皇との間に生まれた古人大兄皇子を皇位につけるため、次期天皇の有力候補である太子の子、山背大兄皇子、(馬子の孫)も入鹿に滅ぼされるという始末。中大兄もまだ二十歳にもならぬ身ながら危険はひしひしと迫ってきていた。密かに入鹿暗殺計画が中大兄、中臣鎌足、蘇我氏の一族ながら反入鹿の蘇我倉山田石川麻呂(娘が中大兄の妃)らの手で進められる。鎌足と中大兄の出合い―有名な法興寺(飛鳥寺)の西の榎の木の前での蹴鞠の会―はよく知られている。

入鹿暗殺の日は遂に来た。六四五年六月十二日、折から三韓の使節が難波にやって来ている。三韓からの上表文を石川麻呂が板蓋宮の大極殿で皇極女帝の前で読む儀式がある。入鹿は大兄だから必ず来る。上表文は石川麻呂が読む。これを合図に入鹿を斬るという手はず、刺客は佐伯連子麻呂、葛城稚犬養連網田。その日、皇極女帝は古人大兄を伴って出御、入鹿が入る。剣は鎌足が官廷の道化師にうまくはずさせていた。入鹿が入ったところを見計らって官殿の十二の全ての門が閉じられた。中大兄は長槍を、鎌足は弓矢を持って物陰に潜む。石川麻呂は上表文を読む。刺客は現れぬ。石川麻呂は冷

や汗たらたら、身体が震える、声も震える。入鹿怪しむ。「どうしたのか」石川麻呂「天皇の前で畏れ多いから・・・」あわやクーデタは失敗したかと思われた時、中大兄が先頭になって入鹿に斬りかかってきた。入鹿、皇極女帝の前で倒れて言う「臣に何の罪ありや」女帝驚いて「何ごとか」中大兄「入鹿は天皇にとって替わろうとしている」女帝さつと奥に入られる。古人大兄はびっくり仰天「韓人(中大兄)が入鹿を殺した・・・」入鹿は死に、首のない屍は大極殿の外に放り出されて折から沛然と降ってきた雨に打たれていた。中大兄は飛鳥寺に入り陣を張る。諸王、諸豪族も中大兄のもとに続々と馳せ参ずる。翌日、蝦夷は甘樫丘の屋敷に火を放って自殺。ここに蘇我宗家は滅び、クーデタは成功した。―まるで映画の一シーンのようですね

皇極女帝は退位しその弟、軽皇子、中大兄の叔父、が即位、孝徳天皇となる。しかし実権は中大兄と鎌足的手中にあった。古人大兄は出家して吉野に逃れたが九月に殺された。―(中大兄の妻、当時は沢山妻がいたが、倭姫命で後の皇后の父ですよね)―六四五年の暮、人心を一新するため難波に遷都『浪速』『難波長柄豊碓宮』である。今のNBSの南東。事が成ると功臣石川麻呂も邪魔、(また妻の父ですヨ)六四九年山田寺に自殺せしめた。孝徳天皇もまた邪魔、中大兄は「飛鳥に帰る」天皇は反対、中大兄は天皇を難波に残して、文武百官と皇后(中大兄の妹、間人皇女)まで連れて白雉四年(六五三年)飛鳥「稲淵宮殿」か、に帰ってしまった。鼠までいなくなったという。孝徳天皇は閔々のうちに間もなく難波で亡くなる。六五五年、皇極上皇、重詐して齊明天皇となる。孝徳天皇の子、有馬皇子一人残され、危険が身にせまる。気がふれたふりをしていたが、遂に計られて謀反のかどで捕らえられた。齊明天皇がかわいがつていた孫で口のきけない健王を病で亡くし、ふさぎこんでいるのをなぐさめると、中大兄は牟呂の湯、今の白浜温泉に齊明天皇をお連れした。飛鳥の留守官、蘇我赤兄(石川麻呂の弟)は有馬皇子の屋敷を訪れ「今の政治はなつてない。」一、税を容赦なく取り立て大きな倉を建て民の財を積む。二、大きな溝をつくり無駄な公共投資をしている。人はこれを『狂心の渠』とのしる。三、船に石を載せて運び丘をつくる。民は皆苦しむ。「皇子起つて下さい」という。若くまだ思慮の浅い皇子は「よし、やろう、吾が年、始めて兵を用ふべき時なり」一、皇居を焼き払う。二、五百の兵を白浜に差し向ける。三、水軍を淡路に派遣して退路を断つ・・・大胆な反乱計画を述べた。と、その時、皇子が身をあずけていた脇息が折れかしいだ。皆不吉な予感がした。その夜、有馬皇子の屋敷は赤兄の兵に囲まれてしまった。そして白浜に連行されていった。白浜に行けば殺されてしまうだろう、と悲痛な気持ちで田辺の手前、岩代というところで歌った有名な歌が「万葉集」に残っている。

岩代の 浜松が枝を 引き結び 真幸きくあらば またかへり見む 卷二―一四一
家にあらば けに盛る飯を 草枕 旅にしあれば 椎の葉に盛る 卷二―一四二

白浜で中大兄に厳しく尋問されたが、皇子は決然といい放つ。「天と赤兄と知らむ、吾もはら知らず」ところが意外にも「帰れ」気味わるかつたろう。しかし後から死刑執行人、丹比小沢連(国襲)がやってきて海南の南、藤白坂で絞殺された。御年十九歳。六五八年のことである。人々の同情をひいて「万葉集」にも、後の人の皇子を悼む歌が残されている。

磐代の 岸の松が枝 結びけむ 人は帰りて また見けむかも

卷―一四三

磐代の 野中に立てる 結び松 情も解けず 古想ほゆ

卷二一—一四四

当時、日本は、朝鮮半島では百済と同盟関係にあつたが、百済は大国、唐と結んだ新羅に攻められ日本に助けを求めてきた。六六一年、斉明天皇、中大兄は百済救援のため出兵。大本營を九州におくために難波を進發した。那の大津、今の博多を経て朝倉の行宮へ、ここで斉明天皇は病をえて崩御。

六六三年日本水軍は、『白村江』において唐、新羅連合軍と戦い、壊滅。百済は滅亡、朝鮮半島の足がかりを失った。大唐がいつ攻めてくるかもしれない。沓岐、対馬、筑紫に『防人』をおき、太宰府を南に下げ、水城、大野城、高安城などを築き守りを固めた。防人は東国から徵發され、二ヶ月以上をかけて、千キロ以上も歩いて任についた。任期は三年、生きて帰れないかもしれない。別れ、望郷の思いを歌った。防人の歌が万葉集に多く残されている。これより少し後の時代だが防人を集めて九州に送る長官を務めたのが大伴家持であり、防人の歌を残した功績は家持にある。

葦垣の 隈処に立ちて 吾妹子が 袖もしほほに 泣きしそおもはゆ

卷二〇—四三五七

韓衣 裾にとりつき 泣く子らを おきてぞ来ぬや 母なしにして

卷二〇—四四〇一

人望の落ちた中大兄、防衛も考え近江に遷都、弟、大海人を皇太子にたてていたが次第に不仲になっていく。六六八年一月、中大兄即位、『天智天皇』となる。天皇にならず政治を執ることを称制という。五月、近江の蒲生野に遊獵。大海人と額田王の間で有名な歌の贈答がなされる。額田はもと大海人の妻で、後に天智の子大友皇子の妃となる十市皇女をもうけていたが、この時は天智の妻であった。

茜さす むらさきのゆき 標野ゆき 野守は見ずや 君が袖ふる

卷一—二一〇

むらさきの 匂へる妹が 憎くあらば 人妻ゆへに 吾恋ひめやも

卷一—二二一

中大兄と大海人は性格が正反対、中大兄は思ったことは断固としてやる。邪魔者は消せ、入鹿、古人大兄、石川麻呂、孝徳天皇、有馬皇子・・・大海人は大人の風格、人望が自づから集まる。今度は弟が邪魔、自分の子供、大友皇子に位を譲りたい。六七一年、大海人が皇太子であるにもかかわらず、大友を太政大臣とした。ところが大友は、伊賀采女宅子との間の子。古代では卑母、家柄が良くないと人々は支持しない。大海人は皇太子、正しくは皇太弟、この世から消えると好都合、一いずれの時代でもある親の煩惱―鎌足が生きている間はよかったが、天智八年、六六九年鎌足死に対立は抜き差しならぬものに・・・六七一年九月天智天皇は病に倒れた。十月十七日、大海人を枕辺に呼び「お前に位を譲る」受ければ殺されると察していた大海人は「大友皇子という立派な皇子がおられるし、倭姫命という皇后がおられる。私は身体が弱いし、出家して天智天皇の治癒を祈りたい」と断った。天智はこれを認め、袈裟をおくった。大海人はただちに内裏の仏殿で髪を下ろし、天智の前にて「吉野にいつて仏道を修行したい」天皇許し賜う、早くも十九日近江を出発吉野に向かった。近江朝廷から蘇我赤兄など重臣が宇治まで見送った。鷯野皇女(天智天皇の娘、自分の姪・なんともややこしい)と共に飛鳥嶋宮に一泊、二〇日には吉野に入った。世の人は「虎に翼をつけて放てり」といった。天智の病はいよいよ重く、大友皇子は重臣を集めて何度も忠誠を誓わせる。十二月三日、遂に天智は崩御。近江の宮から火がでたり大混乱、東国から陵を築くとして、武器をもたせて人民を徵發、更に吉野への食料も抑える。ここにきて大海人は決然として起った。時に六七二年六月二四日であった。吉野を僅か四〇人で進發。大宇陀の安騎を経て大野で夜を迎えたが

夜を徹して歩き、夜半、大友皇子の母、伊賀采女宅子の出身地で敵地である隠、伊賀の駅家焼き、積殖山口で近江を逃れてきた高市皇子と合流、大山を越えて伊勢の鈴鹿に到着した。二六日、朝明の途太川のほとりで伊勢の天照大神を遙拝、戦勝を祈願した。また近江を脱した大津皇子と合流、美濃の軍勢三千で不破の道を塞ぐ、高市皇子を近江攻めの総大将とし、不破に派遣、二七日大海人は不破の郡家に到着、和射美ヶ原(関ヶ原)に大本営をおく、尾張の国司二万の兵を伴い帰属、七月一日から近江の琵琶湖の北、南、大和、河内で近江方と激戦。飛鳥、箸墓も戦場となった。七月二日瀬田橋の戦い、近江軍は総崩れとなった。二三日、進退窮まった大友皇子、山前(やまざき)でみずから首をくくる。御年二五歳、従うものは一、二人にすぎなかったという。(明治三年『弘文天皇』とおくりなされた。)古代最大の争乱、壬申の乱は終わった。――叔父と甥との争い。十市皇女には父と夫の争い。皇室の骨肉の争いであり、戦前は歴史の教科書には出なかった。――九月十二日大海人皇子は飛鳥嶋宮に凱旋。六七二年十二月、大海人皇子、飛鳥浄見原宮で即位、『天武天皇』となる。鸕野讃良皇女、後の持統天皇は皇后となる。四〇人足らずで起ち、僅か一ヶ月で天下を統一、天武天皇は大英雄となった。古代天皇制はこの時確立したのである。壬申の乱以前は使われたことのない「大君は神にしませば・」の言葉、天武、皇后だった持統は宮廷人から「神」とみなされた。

大君は 神にしませば 赤駒の 腹ばふ田井を 都となしつ

卷二〇―四二六〇

天武七年(六七八年)の四月、天皇は倉橋の斎宮に行幸されようとしたとき、宮中で十市皇女が突然亡くなられた。壬申の乱後、近江から父天武のもとにあった悲劇の人の死は、古来自殺ではないかといわれてきた。父と夫が争い、夫を失うという、悲劇の皇女。 高市皇子の挽歌が悲しみを誘う。

やまぶきの たちよそひたる 山清水 汲みにゆかめど 道の知らなく

卷二―一五八

天武八年五月、天皇、皇后と共に吉野に行幸。母を異にする六人の皇子に「朕れ今日汝らと共に誓いて、千載の後に事なからむと欲す、いかに」とのたまった。いわゆる『六皇子の盟約』である。草壁の他、天皇位を継ぐ資格のある最年長で近江攻撃の総大将であつた高市皇子、持統の姉の子大津、忍壁、天智の子河島、志貴の六皇子である。六皇子は「たがうことなし」と誓った。この時の天武天皇の歌といわれる歌が万葉集にある。

よきひとの よしとよくみて よしといひし よしのよくみよ よきひとよくみ 卷一―二七

天武十四年、(六八六年)九月天武天皇崩御、皇后鸕野讃良皇女は皇太子草壁皇子がまだ若年につき稱制、政治をみる。この頃中央集権制は確立、天皇の権威は頂点に達した。しかし、ここにも悲劇はしのびよっていた。『大津皇子の事件』である。大津皇子は鸕野皇后の姉、太田皇女との間に朝鮮出兵の時、那の大津、今の博多で生まれたので大津皇子という。姉は伊勢の斎宮となっていた大伯皇女である。

天武天皇は壬申の乱の折、伊勢の天照大神に戦勝を祈願し、天下平定後、未婚の皇女「大伯」を伊勢の斎宮に遣わされた。大津皇子は文武に優れ、漢詩が盛んになったのは大津に始まるといわれ、草壁皇太子より優れた人物であつたのが悲劇の原因である。石川娘女との相聞歌に才能の一端が何われる。

あしひきの 山のしづくに 妹待つと 吾たち濡れぬ 山のしづくに 卷二―一〇七
吾を待つと 君が濡れけむ あしひきの 山のしづくに ならましものを 卷二―一〇八

天武が亡くなって僅か一ヶ月、謀反のかどで捕らわれ、六八六年十月三日刑死、御年二四歳。辞世の歌

百伝ふ 磐余の池に 鳴く鴨を 今日のみ見てや 雲がくりなむ 卷三―四一六

「懐風藻」「五言。臨終。一絶」

金鳥臨西舎 金鳥西舎に臨らひ、

鼓声催短命 鼓声短命を催す。

泉路無寶主 泉路寶主無し、

此夕離家向 此の夕家を離れて向かふ。

妃の山辺皇女―天智の娘―は髪を振り乱して、はだしで夫のところにおもむき殉死した。皆、人は泣いたという。捕らわれの前、大津はただ一人の肉親、伊勢の姉、大伯皇女のもとに密かにおもむいた。姉、大伯は弟の運命を想い涙したのである。

わがせこそ 大和へやると さ夜ふけて あかとき露に われたちぬれし 卷二―一〇五

二人行けど 行きすぎがたき 秋山を いかにか君が 一人越ゆらむ 卷二―一〇六

大津皇子の薨せし後に、大伯皇女、伊勢の斎宮より京に上る時に作らす歌二首

神風の 伊勢のくにもあらましを なにしか来けむ 君もあらなくに 卷二―一六三

見まくほり 吾する君も あらなくに なにしか来けむ 馬疲るるに 卷二―一六四

大津皇子の屍を葛城の二上山に移し葬る時に、大伯皇女の哀傷して作らす歌二首

うつそみの 人なる吾や 明日よりは 二上山を いろせと 吾が見む 卷二―一六五

磯のうへに 生ふる馬酔木を 手折らめど みすべき君が ありといはなくに 卷二―一六六

万葉集中の絶唱である。

かくして守った草壁皇太子も六八九年僅か二八歳で没してしまった。夫、我が子にも先だたれた持統は在位九年の間に三二回も吉野に行幸している。夫と共に起った『壬申の乱』の出发点であり、神仙の地でもあった吉野で、なえる気持を奮い起こしたのかもしれない。草壁皇太子の子、軽皇子、後の『文武天皇』を守るために六九〇年一月、即位して『持統天皇』となる。持統八年、六九四年十二月、都は飛鳥を去って大和三山の中ほど『藤原宮』に遷る。ここに飛鳥時代は終わりを告げる。

【飛鳥の万葉歌】

サイドラインは大養先生のお歌

① 甘樫丘

明日香宮より藤原宮に遷居し後に、志貴皇子の作りませる御歌

采女の 袖吹きかへす 明日香風 都を遠み いたずらに吹く 志貴皇子 卷一―五二

② 雷丘

天皇の 雷岳に御遊しし時に、柿本人麻呂の作れる歌

大君は 神にしませば 天雲の 雷の上に 慮りせるかも 柿本人麻呂 卷二―三三五

③ 飛鳥坐神社

壬申の年の乱の平定せし以後の歌二首

大君は 神にしませば 赤駒のはらばふ 田井を 都となしつ 大伴御行 卷十九―四二六〇

大君は 神にしませば 水鳥の すだく水沼を 都となしつ 同 卷十九―四二六一

④ 大原神社

天武天皇の藤原夫人に賜える歌一首、並びに藤原夫人の和へ奉れる歌一首

わが里に 大雪降りり 大原の 古りにし里に 降らまは後 天武天皇 卷二―一〇三

わが岡のおかみにいひて 降らしめし 雪の摧けしそこに散りけむ 藤原夫人 卷二―一〇四

大原の 古りにし里に 妹を置きて 我寝ねかねつ 夢に見えつつ 卷十一―二五八七

⑤ 飛鳥民俗資料館

大口の 真神の原に 降る雪は いたくな降りそ 家もあらなくに舍人娘子 卷八―一六三六

⑥ 大養万葉記念館

十市皇女の 薨りましし時に、高市皇子の作りませる歌

山吹の 立ちよそひたる 山清水 汲みに行かめど 道の知らなく 高市皇子 卷二―一五八

⑦ 橘寺

橘の 寺の長屋に わが率寝し 童女放髪は 髪上げつらむか 卷十六―三八三二

⑧ 川原寺

世間の無常を厭ふ歌二首 この二首は川原寺の仏堂の裏に、倭琴の面に在り

生死の 二つの海を 厭はしみ 潮干の山を 偲ひ、つるかも 卷十六―三八四九

世間の 繁き仮庵に 住み住みて 至らぬ国の たづき知らずも 卷十六―三八五〇

⑨ 飛鳥川

今日もかも 明日香の川の夕さらず 河蝦鳴く瀬の清けくあるらむ 上古麻呂 卷三―三五六
 明日香川 瀬瀬の玉藻の うちなびき 情は妹に 寄りにけるかも 卷十三―三二六七
 明日香川 瀬瀬に玉藻は 生ひたれど しがらみあれば 靡きあはなくて 卷七―一三八
 明日香川 七瀬の淀に 住む鳥も 心あれこそ 波立てざらめ 卷七―一三六六
 明日香川 明日も渡らむ 石橋の遠き心は 思ほえぬかも 卷十一―一七〇一
 神岳に登りて山部宿禰赤人の作れる歌の反歌

明日香川 川淀去らず 立つ霧の 思ひ過ぐべき 恋にあらなくに 山部赤人 卷三―三三五

故郷の豊浦寺の私房にして宴せる歌

明日香川 行き廻る岳の 秋萩は 今日降る雨に 散りか過ぎなむ 丹比真人 卷八―一五五七

⑩ 石舞台

皇子尊の宮の舍人らの働しみて作る歌二十三首のうち

島の宮 勾の池の 放ち鳥 人目に恋いて 池に潜かず 卷十一―一七〇

嶋の宮 上の池なる 放ち鳥 荒びな行きそ 君いまさずとも 卷十一―一七二

路の辺の 尾花が下の 思い草 いまささららに 何をか思はむ 卷十一―一三七〇

⑪ 坂田金剛寺跡

御食向かふ 南淵山の 巖には 降りしはだれか 消え残りたる 人麻呂歌集 卷九―一七〇九

南淵の 細川山に 立つ檀 弓束巻くまで 人に知らえじ 卷七―一三三〇

⑫ 高松塚

路の辺の 老師の花の いちしろく 人皆知りぬ 我が恋妻を 卷十一―一四八〇

立ちて思ひ 居てもそ思ふ 紅の 赤裳裾引き 去にし姿を 卷十一―一五五〇

春楊 葛城山に 立つ雲の 立ちても 坐ても 妹をしぞ思ふ 卷十一―一四五三

⑬ 文武天皇陵 檜隈安古岡上陵 真陵は中尾山古墳か

大行天皇の吉野の宮に幸しし時の歌

み吉野の 山のあらしの 寒けくに はたや今夜も 吾が独り寝む 文武天皇 卷一―一七四

⑭ 檜隈川

さ檜の隈 檜隈川の 瀬を早み 君が手取らば 言寄せむかも 卷七―一〇九

さ檜の隈 檜隈川に 馬留め 馬に水かへ 吾よそに見む 卷十一―一〇九七



「飛鳥・藤原」を世界遺産に!
「飛鳥・藤原の宮都(きゅうと)とその関連資産群」は世界遺産登録を目指しています。